

## 回顧的回答における自尊感情バイアスについて

小島 秀夫\*・篠原 清夫\*\*

(2013年11月26日受理)

## On Self-Esteem Bias in Retrospective Responses

Hideo KOJIMA\* and Sugao SHINOHARA \*\*

(Received November 26, 2013)

### 問 題

意識調査においては、これまでに社会的望ましきバイアス (social desirability bias) (DeMaio 1984) やテレスコーピング (telescoping) (Sudman and Bradburn 1973) などのバイアスの存在が知られている。本研究では回顧的回答における自尊感情バイアス (self-esteem bias) といった概念を提示する。自尊感情とは「自分自身に対する肯定的な感情、自分自身を価値ある存在ととらえる感覚のことである。自分に対する認知的評価と自分自身に向けられた感情の双方を含んでいる」(伊藤 2001:48) と定義される。さらに、この感情は個人が自分を他者と比較して自信を感じるとか、優越感を持つといったものではなく、自分自身に対して尊敬でき、価値ある人間ととらえることができる程度である (内田・上埜 2010)。

ここで、われわれがどのように自尊感情バイアスという概念にたどりついたのかについて説明しておく必要がある。回顧的回答 (retrospective response) は意識調査において多く使用されているが、この領域の研究は我が国ではほとんどなされていない。回顧的回答についての研究動向については小島・篠原 (2011) で紹介されている。われわれは 1991 年と 2002 年の教師調査のデータを使用して、同じ回顧的質問に対する回答結果を、同一コーホートに注目することによって比較した (小島・篠原 2011)。分析に使用された質問は、たとえば「あなたはいつ頃明確に『教職につきたい』と考えるようになりましたか」や「あなたが教職についた頃は、時代的に教職につくのが困難でしたか。それともそうではありませんでしたか」など 11 の回顧的質問である。これらの質問の中で回答に変化があることが明らかにされたものは「生徒理解不安」, 「先輩教師不安」, 「相談できる先輩」と「教職につく困難度」であった。たとえば、教師になった時に「生徒理解」について不安を「非常に感じた」の比率は 1991 年の 20 代では 36.4% であるのに対して、2002 年の 30 代では 23.1% と低下していることが明らかにされた。

---

\*茨城大学教育学部社会情報研究室 (〒 310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1) .

\*\*三育学院大学看護学部 (〒 298-0297 千葉県夷隅郡大多喜町久我原 1500) .

こうした変化の観察された質問項目を見ると、すべて現在の職業遂行能力や職業認知に関連するものであることが理解できる。そこで、こうしたバイアスをもたらす原因を自尊感情であるとらえ、このバイアスを自尊感情バイアスであると考えたのである。

## データと方法

回顧的回答における回答バイアスを解明するためには、同一個人に対して時間をおいて調査するパネル調査か、あるいは同一の集団を対象とした調査データを使用し、同じ年齢コーホートの回答を比較する方法が考えられる。まず最初に、同じ年齢コーホートの回答に注目することとした。その目的のために、ここでは以下の4つのデータ・セットを使用する。1つは1991年に茨城県内の小・中学校の一般教師2,000名を対象とした調査であり、回収率は68.2%となったデータである。第2は2002年に1991年調査と同一の枠組みで実施したもので、2,000名を対象とし、回収率が61%となったデータである。第3のデータは、茨城県内の小・中学校の管理職者（校長・教頭）全員（1,642名）を対象とした調査で、2011年に調査を実施し、回収率は50.5%となったデータである。さらに補助的なデータとして、1991年に実施した茨城県内の小・中学校管理職者（校長・教頭）全員（1,678名）を対象とした調査で、回収率が83.7%となったデータを使用する。これらの調査では郵送調査法が使用され、同一地域であり、回収率も比較的高いために、比較上の問題はない。分析では1991年の調査時点で30代の教師に注目する。それらの教師は2002年には40代、2011年には50代となっている。この年齢コーホートに注目することによって、回顧的質問に対するバイアスを解明することとする。

ここで分析に使用される質問は2つである。1つは「あなたが初めて教師になった時に、学生時代の頃考えていた教職についてのイメージと現実はどのようなものだったでしょうか」と質問し、「学生時代に予想していたものとはあまりに違って、とまどいを感じた」「少しはギャップを感じたが、大方は予想していた通りであった」「ほとんど予想通りで、ギャップはほとんど感じなかった」の選択肢の中から1つを選択してもらった。この質問をリアリティ・ショック質問とよぶこととする。他の1つは「あなたが教職についた頃は、時代的に教職につくのが困難でしたか。それともそうではありませんでしたか」と質問し、選択肢は「難しかった」「普通だった」「やさしかった」である。この質問は、教職につく困難度質問とよぶこととする。

## 分析結果

表1にリアリティ・ショックの結果が示されている。ここでは各調査年度の比率の分布について言及する必要はなく、調査年度で差が認められるかどうかが重要である。そこで、すべての組み合わせについて $\chi^2$ 検定を実施したところ、1991年と2002年では差は認められず（ $\chi^2=4.81$  df=2 p=0.090）、2002年と2011年の間で統計的に有意な差が認められた（ $\chi^2=11.21$  df=2 p=0.004）。1991年と2011年の間でも統計的に有意な差が認められた（ $\chi^2=30.47$  df=2 p=0.000）。したがって、

ここでは教師が40代から50代になるについて、回答バイアスが発生するといえる。

2011年のデータは管理職のデータであり、管理職であるためのバイアスが存在することも予想されるが、表2に示されたように、一般教師と管理職で差は存在していない。表2は1991年に実施した一般教師と管理職者調査で、共通するリアリティ・ショックの質問の結果であり、50代の対象者を比較したものである。管理職に男性が多いことを考え、性差も考慮して分析もしてみたが差は認められなかった。この結果より、リアリティ・ショックに対する回答は、回答者の職業的社会化が完成するにつれて、より自己肯定的な方向へと回答しているといえる。

表1 リアリティ・ショック (%)

年度 (年齢)	とまどった	予想通り	感じなかった	計 (実数)
1991年 (30代)	31.6	60.6	7.7	100.0(N=648)
2002年 (40代)	28.5	60.5	11.0	100.0(N=625)
2011年 (50代)	21.9	62.8	15.5	100.0(N=782)

(注) 丸めによる誤差のために、比率の合計が100.0%にならないことがある。

表2 リアリティ・ショック (1991年一般教師50代と管理職50代) (%)

年度 (年齢)	とまどった	予想通り	感じなかった	計 (実数)
1991年 (50代)	19.9	63.4	16.8	100.0(N=180)
1991年(管理職50代)	26.1	57.2	16.7	100.0(N=1,319)

(注) 丸めによる誤差のために、比率の合計が100.0%にならないことがある。  $\chi^2=3.95$   $df=2$   $p=0.138$

表3には教職につく困難度質問の結果が示されている。ここでは1991年と2002年の間に大きな差が認められ「難しかった」の比率が減少し、かわって「やさしかった」の比率が増加している ( $\chi^2=101.85$   $df=2$   $p=0.000$ )。2002年と2011年の間でも統計的に有意な差が認められる ( $\chi^2=6.80$   $df=2$   $p=0.033$ )。表4には管理職であることによって生じる可能性のあるバイアスを調べた結果が示されているが、統計的に有意でなく、かつ性差による差も認められなかった。困難度で「やさしかった」の比率が上昇している要因として考えられるのは、このコーホートの後のコーホートでより教職につくのが困難になったために、相対的に「やさしかった」と考えるようになった可能性が想定できるが、もしそうであれば1991年時点で、もっと「やさしかった」の比率が高くなければならないはずである。なぜならば、後のコーホートほど教職につく困難度は茨城県ではやや上昇しているためである。

こうしたことを考えれば、表3に示された結果は自尊感情バイアスによってもたらされたものと考えられよう。すなわち、現時点での自己の職業能力や環境からみれば、採用試験は難しかったとしても、それほど困難であったとは考えないようになるのである。

表3 教職につく困難度（％）

年度（年齢）	難しかった	普通だった	やさしかった	計（実数）
1991年（30代）	34.4	57.3	8.3	100.0(N=649)
2002年（40代）	16.7	56.5	26.8	100.0(N=630)
2011年（50代）	18.3	49.7	31.9	100.0(N=786)

（注）丸めによる誤差のために、比率の合計が100.0%にならないことがある。

表4 教職につく困難度（1991年一般教師50代と管理職50代）（％）

年度（年齢）	難しかった	普通だった	やさしかった	計（実数）
1991年（50代）	33.3	47.8	18.9	100.0(N=180)
1991年（管理職50代）	32.2	41.7	26.1	100.0(N=1,321)

（注）丸めによる誤差のために、比率の合計が100.0%にならないことがある。  $\chi^2=4.71$  df=2 p=0.095

### パネル・データの分析

回顧的回答における自尊感情バイアスを確認するために、ここでもう1つのデータを使用する。使用するのはパネル・データである。このデータは1984年から86年にかけて茨城大学教育学部生1,024人を対象として最初調査を実施し、その後1991年に、教職についている卒業生を対象として第1回のパネル調査を実施した。803人に対して調査票を発送し、592人から回答を得た（回収率73.7%）。第2回のパネル調査は2011年に実施した。2011年時点で教職についていることが確認された卒業生598人に調査票を発送し、309人から回答を得た（回収率51.3%）。まず最初に、第1回と第2回の回答者の比較を行う。これらの対象者は同じコーホートである。

分析に使用される質問は、学生時代に重視したこととリアリティ・ショックである。学生時代に重視していたことに関する質問は、具体的には「あなたは、大学3年の頃に、以下に示されている事柄をどの程度重視していましたか。それぞれについて答えて下さい」と質問し、(1)多くの友人をつくること、(2)本をたくさん読むこと、(3)広い教養を身につけること、(4)専門的知識を身につけること、(5)大学の教師と親しくなること、(6)特別な資格をとること、(7)青春を楽しむこと、(8)旅行をすること、(9)アルバイトをして世間を知ること、(10)事務能力を身につけること、の10項目を用意し、それぞれについて「かなり重視した」「すこし重視した」「どうともいえない」「あまり重視しなかった」「まったく重視しなかった」の選択肢の中から1つを選択してもらった。もう1つの質問はリアリティ・ショック質問である。これらの質問文は第1回と第2回のパネル調査でまったく同じものである。

表5の結果をみると、統計的に有意な差が認められた項目は「本をたくさん読むこと」「広い教養を身につけること」「専門的知識を身につけること」「大学の教師と親しくなること」「青春を楽しむこと」「旅行をすること」「事務能力を身につけること」であることが明らかにされる。「かなり重視した」の比率に注目すると、「専門的知識を身につける」と「青春を楽しむ」において大きな差が

認められる。したがって、ここでも自尊感情バイアスが働いているといえよう。すなわち、学生時

表5 学生時代に重視したこと（同一コーホート）（%）

項目	かなり重視	すこし重視	どうとも	あまり重視しなかった	重視しなかった	計(実数)
(1)友人	29.1	38.3	14.7	16.0	1.5	100.0(N=587)
	21.4	45.8	16.2	15.6	1.0	100.0(N=308)
$\chi^2=8.02$ df=4 p=0.091						
(2)本を読むこと	18.7	42.2	14.5	19.2	5.4	100.0(N=588)
	14.6	44.5	17.9	21.1	1.9	100.0(N=308)
$\chi^2=10.04$ df=4 p=0.040						
(3)広い教養	19.3	46.9	20.0	12.6	1.2	100.0(N=586)
	23.1	51.9	18.2	6.2	0.6	100.0(N=308)
$\chi^2=11.39$ df=4 p=0.022						
(4)専門的知識	35.4	47.4	9.0	7.0	1.2	100.0(N=587)
	48.9	42.7	5.2	2.6	0.6	100.0(N=309)
$\chi^2=21.48$ df=4 p=0.000						
(5)大学の教師	4.9	22.4	30.4	33.8	8.5	100.0(N=589)
	2.9	27.2	36.9	26.5	6.5	100.0(N=309)
$\chi^2=11.23$ df=4 p=0.024						
(6)特別な資格	11.7	20.7	23.4	31.2	12.9	100.0(N=589)
	16.2	25.2	21.7	27.5	9.4	100.0(N=309)
$\chi^2=8.33$ df=4 p=0.080						
(7)青春	39.5	36.4	17.2	6.0	1.0	100.0(N=588)
	27.6	47.4	19.5	3.9	1.6	100.0(N=308)
$\chi^2=16.87$ df=4 p=0.002						
(8)旅行	20.7	32.5	18.0	18.0	10.7	100.0(N=588)
	12.0	34.0	20.4	24.9	8.7	100.0(N=309)
$\chi^2=14.95$ df=4 p=0.005						
(9)アルバイト	15.4	33.8	25.6	20.2	4.9	100.0(N=589)
	11.4	34.1	25.6	23.4	5.5	100.0(N=308)
$\chi^2=3.43$ df=4 p=0.487						
(10)事務能力	1.2	4.9	23.4	37.5	32.9	100.0(N=589)
	0.6	5.2	30.1	40.5	23.6	100.0(N=309)
$\chi^2=10.46$ df=4 p=0.033						

(注)丸めによる誤差のために、比率の合計が100.0%にならないことがある。質問文については、本文を参照せよ。上段が第1回パネル調査の結果、下段が第2回パネル調査の結果。

代には実際以上に専門的知識を学び、広い教養を身につけるようにしていたと考える一方では、青春を楽しんだり、旅行をしたりすることに関しては、やや禁欲的な回答をしているのである。

リアリティ・ショックについては、表6に示されるように、差は認められなかった。

表6 リアリティ・ショック（同一コーホート）（%）

時 点	とまどった	予想通り	感じなかった	計（実数）
1991年	27.4	62.9	9.7	100.0(N=588)
2011年	28.2	61.0	10.7	100.0(N=308)

（注）丸めによる誤差のために、比率の合計が100.0%にならないことがある。  $\chi^2=0.36$  df=2 p=0.835

さらに、パネル調査であることの利点を生かして、同一個人の意識の変化に注目してみることにする。そのために、ここでは第1回と第2回のパネル調査の両方に回答した人のみを取り出し、比較することとした。その結果が表7に示されているが、ここでも表5とよく似た結果がでている。ここで統計的に有意な項目は、「広い教養を身につけること」「専門的知識を身につけること」「大学の教師と親しくなること」「青春を楽しむこと」「旅行をすること」「事務的能力を身につけること」である。変化の方向は、表5の場合と同じである。ここでも「かなり重視した」の比率の変化が大きい項目は「専門的知識を身につける」と「青春を楽しむこと」である。ここで自尊感情バイアスが働いていることが確認できる。表8に示されたリアリティ・ショックについては差は認められない。

表7 学生時代に重視したこと（パネル）（%）

項目	かなり重視	すこし重視	どうとも	あまり重視しなかった	重視しなかった	計（実数）
(1)友人	28.3	37.1	15.9	16.7	2.0	100.0(N=251)
	22.3	47.0	15.9	13.5	1.2	100.0(N=251)
$\chi^2=6.08$ df=4 p=0.194						
(2)本を読む	17.5	48.2	13.5	15.1	5.6	100.0(N=251)
	15.9	43.4	17.1	21.5	2.0	100.0(N=251)
$\chi^2=8.91$ df=4 p=0.063						
(3)広い教養	20.7	45.4	19.5	12.7	1.6	100.0(N=251)
	24.7	50.6	18.3	6.0	0.4	100.0(N=251)
$\chi^2=9.62$ df=4 p=0.047						
(4)専門的知識	39.0	45.4	7.2	7.2	1.2	100.0(N=251)
	51.2	41.3	5.2	2.6	0.4	100.0(N=251)
$\chi^2=13.84$ df=4 p=0.008						
(5)大学の教師	4.4	22.2	27.8	36.5	9.1	100.0(N=251)
	2.8	30.6	37.7	23.0	6.0	100.0(N=251)
$\chi^2=17.38$ df=4 p=0.002						

(6)特別な資格	13.5	18.3	22.2	33.7	12.3	100.0(N=252)
	15.9	26.6	21.8	27.8	7.9	100.0(N=252)
$\chi^2=8.22$ df=4 p=0.084						
(7)青春	38.6	35.5	18.7	5.6	1.6	100.0(N=251)
	28.3	46.6	20.7	2.8	1.6	100.0(N=251)
$\chi^2=10.41$ df=4 p=0.034						
(8)旅行	20.2	36.5	11.9	19.0	12.3	100.0(N=252)
	11.5	34.1	20.2	23.8	10.3	100.0(N=252)
$\chi^2=13.46$ df=4 p=0.009						
(9)アルバイト	17.9	29.0	22.6	24.2	5.3	100.0(N=252)
	12.0	35.9	24.7	21.5	6.0	100.0(N=251)
$\chi^2=5.44$ df=4 p=0.245						
(10)事務能力	1.2	4.4	22.2	35.7	36.5	100.0(N=252)
	0.8	5.2	30.2	40.5	23.4	100.0(N=252)
$\chi^2=11.36$ df=4 p=0.023						

(注) 丸めによる誤差のために、比率の合計が 100.0%にならないことがある。質問文については、本文を参照せよ。上段が第 1 回パネル調査の結果、下段が第 2 回パネル調査の結果。

表 8 リアリティ・ショック (パネル) (%)

時 点	とまどった	予想通り	感じなかった	計 (実数)
1991 年	28.8	63.2	8.0	100.0(N=250)
2011 年	29.0	59.1	11.7	100.0(N=252)

(注) 丸めによる誤差のために、比率の合計が 100.0%にならないことがある。  $\chi^2=2.26$  df=4 p=0.323

表 9 には同一項目に関して、個人の意識の変化の方向が示されている。ここでは、たとえば「多くの友人をつくること」に関して、1991 年の第 1 回のパネル調査と 2011 年の第 2 回パネル調査を利用して、クロス表を作成し分析した。表中の過大評価率とは、ある項目の重視度について第 1 回のパネル調査よりも第 2 回パネル調査で高くなった割合を示し、反対に過小評価率は第 1 回のパネル調査よりも第 2 回のパネル調査において重要度を低下させた割合を示す。一致率は第 1 回と第 2 回のパネル調査で同じ評価をした割合を示している。表中の (d) は過大評価率を過小評価率で除した比率で、変化の方向を示すものであり、1 より大きい値の場合には第 1 回のパネル調査よりも第 2 回のパネル調査では重視する方向に変化していることを示し、反対に 1 より小さい値の場合には第 1 回のパネル調査より第 2 回のパネル調査では重視度が低下していることを示す。相関係数は「かなり重視した」に 5 点、「すこし重視した」に 4 点、「どうともいえない」「あまり重視しなかった」「まったく重視しなかった」にそれぞれ 3 点、2 点、1 点を与え算出した。

結果を簡単に見てみよう。過大評価率が相対的に高い項目としては「大学の教師と親しくなること」と「特別な資格をとること」が目につく。反対に過小評価率が相対的に高い項目としては「旅行を

表9 評価の変化（パネル）

項目	(a)過大評価率	(b)一致率	(c)過小評価率	(d) (a)/(c)	相関係数	実数
(1)友人	0.27	0.45	0.28	0.96	.404	250
(2)本を読む	0.27	0.41	0.32	0.84	.467	250
(3)広い教養	0.35	0.44	0.21	1.67	.323	250
(4)専門的知識	0.32	0.55	0.13	2.46	.412	251
(5)大学の教師	0.40	0.38	0.22	1.82	.431	252
(6)特別な資格	0.39	0.36	0.25	1.56	.414	252
(7)青春	0.22	0.48	0.30	0.73	.513	250
(8)旅行	0.21	0.45	0.34	0.62	.667	252
(9)アルバイト	0.26	0.46	0.28	0.93	.509	251
(10)事務能力	0.38	0.42	0.20	1.90	.425	252
リアリティ・ショック	0.19	0.64	0.19	1.00	.398	250

（注）丸めによる誤差のために、比率の合計が 100.0%にならないことがある。質問文については、本文を参照せよ。

すること」「本をたくさん読むこと」がある。一致率が相対的に高い項目としては「リアリティ・ショック」と「専門的知識を身につけること」がある。本研究の目的のために重要なのは (a)/(c) の値である。この値が高い項目としては「専門的知識を身につけること」「事務的能力を身につけること」「大学の教師と親しくなること」と「広い教養を身につけること」がある。反対にこの値が低い項目には「旅行をすること」と「青春を楽しむこと」がある。こうした結果から、回顧的回答には自尊感情バイアスが存在していると判断できよう。すなわち、回答者は自己の現在の職業能力や職業環境によって、意識的・無意識的に現在の自己のイメージやアイデンティティに合致するように、回答にバイアスを与えているといえよう。

## 要約と結論

本研究は、回顧的回答における自尊感情バイアスを検証することであった。同一集団に対する調査と、パネル調査データを利用し、同一の回顧的質問に対する回答を分析した結果、以下のようなことが明らかにされた。

- (1) 同一コーホートに注目した分析結果では、「教職につく困難度」質問において明確な差が認められた。リアリティ・ショック質問については、対象者の年齢が上昇するにつれて、少しの差が認められた。
- (2) パネル調査データの分析では、10項目の回顧的質問が分析されたが、その内の6項目で差が認められた。それらの中でも注目すべきは、「専門的知識を身につけること」を学生時代

に重視していたという比率が、第1回のパネル調査時点よりも第2回のパネル調査時点で上昇していることである。反対に、「旅行をすること」や「青春を楽しむこと」を重視した比率は、第1回のパネル調査よりも第2回のパネル調査において低下している。

こうした回顧的回答の変化は、個人の現在の職業能力や職業意識を肯定的に評価する方向に変化しており、自尊感情バイアスによってもたらされているものと考えられる。

## 引用文献

DeMaio, Theresa J. 1984. "Social Desirability and Survey Measurement: A Review." In Charles F. Turner and Elizabeth Martin (eds.), *Surveying Subjective Phenomena 2*, New York: Russell Sage Foundation, pp. 257-282.

伊藤忠弘. 2001. 「自尊感情」山本真理子ほか編『社会的認知ハンドブック』北大路書房, pp. 48-49.

小島秀夫・篠原清夫. 2011. 「回顧的回答の安定性・不安定性について」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）』60号, pp. 85-98.

Sudman, Seymour and Norman Bradburn. 1973. "Effects of Time and Memory Factors on Response in Surveys." *Journal of the American Statistical Association*, 68, 805-815.

内田知宏・上埜高志. 2010. 「Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第58集・第2号, pp. 257-266.

付記：本研究で使用されたデータはすべて科学研究費（平成22年度—平成24年度）によるものである。調査に御協力いただいた皆様に感謝いたします。なお、本研究は第84回日本社会学会（2011年9月17日・18日 関西大学）で発表したものを加筆・修正したものである。